HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	国際学術会議 "Fifth CESS Regional Conference" 参加報告
Author(s)	櫻間, 瑛
Citation	日本中央アジア学会報, 13, 65-69
Issue Date	2017-07-31
DOI	https://doi.org/10.14943/jacas.13.65
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/88309
Type	journal article
File Information	JB013_014sakurama.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

国際学術会議 “Fifth CESS Regional Conference” 参加報告

櫻間　瑛

2016年6月2～4日にかけ、ロシア連邦タタルスタン共和国の首都、カザンにてCESS（Central Eurasian Studies Society: 中央ユーラシア学会）の地域大会（Regional Conference）が開催された。筆者は本会議に全日程参加し、報告も行った。同学会は本学会と専門地域を同じくしており、将来参加する会員も多くいると思われる。そこで本稿では、大会全体の組織や雰囲気を紹介するとともに、各セッションの様子・傾向についても紹介したい。

CESSは例年10月に米国内で年次大会を開催しているが、それとは別に2008年から隔年で、5～6月に研究対象地域に当たる中央ユーラシア各地で、現地の研究機関がホストになる形で地域大会が開催されている(1)。

今回の大会はカザン連邦大学がホストとなり、会場を提供した他に、ビザに必要な招待状の発行や、参加者の宿泊場所（大学のゲストハウスか市内のホテルから選択可）の手配も行った。大会への参加登録は1月半ばまで行われ、要旨の査読を経て、3月初頭に参加の可否が通知された上、参加が認められた場合には、滞在期間及び宿泊場所の希望に関するアンケートが送られてきた。滞在期間に関しては、前後に多少余裕を見た日程でも認められ、現地調査を兼ねた参加も可能であった（筆者の場合、前後2日ずつ余裕を見た日程で申請し、そのまま認められた）。その後、招待状の手配は比較的スムーズに行われ、ホテルもやや直前にはなったものの、要望通りの部屋が用意されていた。途中、メールで問い合わせなどをしたときにも、毎回丁寧な返信があり、非常に努力している様子が窺われた。

会議は全体で3日間あり、初日と最終日のKeynote Speechのほか、50近いパネルが組まれ、活発な議論が繰り広げられた。各パネルは1時間45分で、3～4名が報告し、コメンテーターによるコメントの後に自由討論という形が取られた（もっとも、司会の時間配分が十分でなく、自由討論の時間が取れなかったパネルも目立った）。

パネルを分野別にみると、「人類学･文化研究」が10、「教育」が2、「歴史」が7、「国際関係」

(1) これまでに同大会が開催されたのは以下のとおり。第1回（2008年）：クルグズスタン（イシク・クル）、第2回（2010年）：トルコ（アンカラ）、第3回（2012年）：グルジア（トビリシ）、第4回（2014年）：カザフスタン（アスタナ）。

写真１　大会報告の様子

が 7、「言語」が 1、「政治」が 5、「宗教」が 8、「社会」が 8 となっている（大会のプログラムは、CESS の HP からダウンロードが可能：https://cess.memberclicks.net/assets/conf/cess-2016_5th-reg_kazan-federal-u.pdf）。歴史に関するセッションはそれほど多くなく、全体的に現在各地域が抱えている問題に直接関連するテーマが多く取り上げられていたのが印象的であった。もちろん、歴史に分類されていないパネルの中でも歴史を対象としている報告はあったが、逆に歴史を題材にしている報告でも、現代の問題に直接関わるようなテーマ設定の報告が目についた。

特に「社会」に分類されているセッションの中には、労働移民やジェンダー、若者の運動について取り上げたセッションがあり、現代の中央ユーラシア地域が直面している問題の現状について議論が展開された。また国際関係のセッションでは、中国、ロシアはもちろん、インドやトルコ、中東地域との関係について論じたセッションもあり、様々な勢力が拮抗する、中央ユーラシア地域の地政学的な位置を反映しているといえよう。

こうした中、特に目立ったのがイスラームに関連するセッションである。これらのセッションでは、特にイスラームと国家、あるいは社会との関係、特にその中でどのようなものが「あるべきもの」として捉えられているのかについて論じている報告が目立った。例えば、2 日目の最初に行われたセッションのうちの 1 つは、“Exploring Muslim Religious Authority in Russia and Kazakhstan”と銘打たれ、ロシア、カザフスタン双方におけるイスラームのあり方をめぐる議論について論じられた。ここでは、「伝統イスラーム」の捉え方や、「よいイスラーム」、「悪いイスラーム」の区分に関する問題が、政治的・社会的な側面から分析されており、聴衆も多く集まり、ディスカッションも活発に展開されていた。

こうした傾向を反映するように、2つのキーノート・スピーチもイスラームのあり方に関する内容であった。初日のキーノート・スピーチには、アムステルダム大学のM. Kemper氏が登壇し、“Islam and the Orthodox Church in Russia: Competing Twin?”という題名で講演を行なった。Kemper氏は、主にヴォルガ地域やカフカスを対象に、帝政末期からソ連期にかけてのムスリムの動向を研究する歴史家として知られているが、この講演では現代ロシアにおけるイスラームのあり方が、ロシア正教会のあり方と対比する形で論じられた。ここでは、モスクでの使用言語の問題や、近年のムフティーの動向、イスラームに関連する遺産の復興事業などに言及しつつ、ロシア正教が主流をなすロシア国家の中で、イスラームがいかに自らの存在の正当性を確保しようとしているか、という問題が論じられた。討論の時間には、多くの参加者から歴史の中での位置づけや評価に関して様々な質問・意見が提起され、時間を大幅に超過して、最後は会場使用時間も超え、場所を移して議論が展開された。

最終日のキーノート・スピーチは、当初はロシア科学アカデミー東洋学研究所所長のV. Naumkin氏の講演が予定されていたが、都合がつかなかったらしく、直前になって同じく東洋学研究所でアラブ･イスラーム研究センターの主任研究員であるT. Ibragim氏に交代となった。講演の題目は、“Quranic Principles of Inter-faith Harmony”（ただし報告はロシア語で行われた）で、「イスラーム過激派」に注目が集まっている点を意識しつつ、多くのムスリムは基本的に平和共存を望んでいることを強調した。特に、イスラーム哲学・神学を研究するという立場から、クルアーンというテキスト自体の複層性に着目し、その原理自体が諸宗教の共存などを可能にする原理やヒューマニスティックな性格を含んでいることが論じられた。もっとも、筆者が聞いている限りでも多分に護教的な印象は否めず、討論の際にも会場から現状の理解に際して楽観的にすぎる見方ではないか、という意見が複数出された。

またこの大会では、研究報告に関するプログラムとは別に文化プログラムも組まれた（交通費等を含む参加費は別途必要）。初日の開会式前に、カザン中心部のカザン・クレムリン内にあるクル＝シャリフ・モスク、最終日の夕方に、カザン近郊にあり帝政期にこの地域のロシア正教の中心地であったスヴィヤシスク島、最終日翌日にカザンから南に約200キロの位置にあるかつてのヴォルガ･ブルガリアの首都ボルガル遺跡のツアーが用意されていた（筆者は、どれもかつて訪問したことがあったので参加は見送った）。

これらは、現在タタルスタンが「ロシア正教と共存するイスラーム」という自己像を示すために、積極的に宣伝しているものである(2)。特にボルガルはスヴィヤシスクとともに、2010年から大規模な再開発が進められ、2014年には世界遺産にも選ばれた。さらに2015年

(2) カザン・クレムリン及びクル＝シャリフ・モスクを通じた、タタールのイスラーム表象に関してはKinossian［2012］及びDerrick［2012］が詳しい。また、スヴィヤシスク及びボルガルの近年の再開発と表象については、拙稿［2012; 2016］も参照されたい。

写真２　カザン・クレムリン内のクル＝シャリフ・モスク

には、ここでロシアのムスリムの道徳規範などについて明記した「ロシア・ムスリムの社会ドクトリン」が署名されるなど、奇しくも Kemper の指摘した現在のロシアにおけるイスラーム表象の最前線を実地に見る機会が用意されたともいえる。

今大会全体の印象として、カザフスタンの参加者が多く目につき、中でもナザルバエフ大学からの参加者が目立っていた。プログラムの参加者一覧で確認した限り、ナザルバエフ大学だけで、20 名の参加者があり、ホストであるカザン連邦大学からの参加者（24 名）に匹敵する参加者数であった。カザン大学からの参加者には、司会やコメンテーターとしてのみの参加者もかなり含まれていることを考えると、ナザルバエフ大学はかなりの存在感を示していたといえよう。大会当時の CESS 会長で、この大会の実質的なオーガナイザーであった Schoeberelein 氏の所属先であり、その働きかけがあったであろうことを考慮しても、同大学が相当に国際会議等への参加に積極的な様子が窺える。

逆に他の中央アジア諸国（クルグズスタンからは 7 名、ウズベキスタンとタジキスタンからは各 2 名ずつ、トルクメニスタンからは 0）やカフカス等（アゼルバイジャンから 1 名のみ）からの参加者はかなり限定的であったのは残念であった。こうした現状には、参加費の捻出の問題や、現地の研究者の英語能力の問題もあるのであろう（実際には、ロシア語での報告も少数ながら含まれていた）。

また他の地域に目を向けると、欧米からの参加者も多く見られた一方、アジアからの参加

者はかなり限定的であった。中国からの参加者も 1 名に過ぎなかったのはやや意外な感がある。それに対し、日本からはプログラム上は 7 名の参加登録があり、登録人数としては比較的多い部類に入った。もっとも、実際に参加したのは、確認した限り筆者を含めて 3 名にとどまり（かつ全員がタタールに関係する研究者）、やや寂しい結果となった。

先にも記した通り、前後の日程を伸ばしたり、空き時間を利用して現地調査や資料収集も行えるという点で、この地域大会への参加には地理的な利便性がある。また、現地の問題意識などを幅広に把握できるという点では、非常に参加の価値のあるものであろう。さらに、中央ユーラシア地域出身の研究者が多く集まる中で報告を行うことは、研究成果の現地還元という面からも意義があると考えられる。

これまでは隔年で実施されていたが、続く第 6 回大会は 2 年連続となる 2017 年の 6 月末にキルギスのビシケクにある中央アジア・アメリカン大学で、ヨーロッパ中央アジア学会（European Society for Central Asian Studies: ESCAS）との共催で行われ、今後はより頻繁な開催に移行することも考えられる。今後は日本からもより積極的な参加者がでることも期待されるであろう。

参考文献

（邦語）

櫻間瑛 2012「文明の交差点における歴史の現在――ボルガル遺跡とスヴィヤシスク島の「復興」プロジェクト」望月哲男・前田しほ編『文化空間としてのヴォルガ（スラブ・ユーラシア研究報告集 4）』札幌：北海道大学スラブ研究センター、157–174 頁。

――― 2016「「東西文化の交流点」で――ロシア連邦ボルガル遺跡を巡るポリティクス」『月刊みんぱく』40(12)、16–17 頁。

（欧文）

Derrick, Matthew. 2012. “The Tension of Memory: Reclaiming the Kazan Kremlin,” *Acta Slavika Iaponica*, 33, pp.1–25.

Kinossian, Nadir. 2012. “Post-Socialist Transition and Remaking the City: Political Construction of Heritage in Tatarstan,” *Europe-Asia Studies*. 64 (5), pp.879–901.

（日本学術振興会特別研究員 PD）